

✧ 研究会報告 ✧

「帝国日本」境界の祭祀再編と海外神社班 2021 年度研究会

「普天間宮、斎場神社、北山神社、宮古神社、八重山神社の県社化—昭和 18 年の沖縄県神社創立計画案を手掛かりに」

日 時：2021 年 7 月 10 日（土）13:00～14:40

場 所：みなとみらいキャンパス、Zoom 会議

報告者：前田 孝和（非文字資料研究センター 客員研究員）

加藤 里織（日本常民文化研究所 特別研究員）

はじめに

神奈川大学非文字資料研究センターの共同研究プロジェクト「「帝国日本」境界の祭祀再編と海外神社班（通称「神社班」）」の 2021 年度研究会を 7 月 10 日に開催した。新型コロナウイルス感染拡大により同年 4 月 25 日より発出されていた 3 回目の緊急事態宣言は、6 月 20 日をもって解除となったが、翌 7 月 12 日より再び緊急事態措置が実施されることもあり、4 月に新設された神奈川大学みなとみらいキャンパスでの公開開催は見送られた。そこで発表者の前田孝和氏と研究班代表で司会進行を務めた後田多敦氏（神奈川大学国際日本学部教授）、神社班研究協力者の筆者がみなとみらいキャンパスから、また非文字資料研究センター職員の成田紅音氏が六角橋キャンパスから共同ホストとなり、WEB 会議サービスの Zoom を使用してオンラインでの研究会開催となった。

前回の研究会（2020 年 10 月 3 日）から約半年ぶりに開催された研究会では、前田孝和氏（神奈川大学非文字資料研究センター客員研究員）により、「普天間宮、斎場神社、北山神社、宮古神社、八重山神社の県社化—昭和 18 年の沖縄県神社創立計画案を手掛かりに」と題して、沖縄の神社について報告が行われた。

研究会の開始間際に Zoom 設定上のトラブルがあり、開始時刻が大幅に遅れてしまった。そのため途中からの参加になってしまった方もいたなど、運営の不利で参加者各位に多大なご迷惑をおかけしてしまった。ここで改めて、発表者の前田氏はじめ参加者各位にお詫びを申し上げます。

今研究会の発表者である前田孝和氏は、神社新報社の記者を経て取締役をされていたほか「神社問題研究会」を主宰されるなどのご経歴があり、神社本庁史を中心に、ハワイや樺太、北方領土、ブラジルの神社のほか、近年

では沖縄の神社も研究されている。著書には『ハワイの神社史』（大明堂、平成 11 年）、『樺太の神社』（共著、北海道神社庁、平成 24 年）、『遷宮をめぐる歴史』（共著、明成社、平成 24 年）などがある。

本研究会での報告の詳細については、前田氏による論考が『非文字資料研究』（第 24 号、2022 年）に掲載されるので、ここでは発表の内容は概要にとどめておき、報告後に行われた質疑応答での議論を中心に報告したい。



写真1 研究会案内



1. 研究会報告概要

沖縄では、沖縄県が明治12年に設置（琉球処分）されて以降、神社の創建、御嶽の神社化が試みられたが、実際はかけ声だけでなかなか具体化されなかった。沖縄県が昭和18年10月2日付で内務大臣に提出した「神社創立計画案二関スル件」は、明治大正昭和の65年にわたる集大成ともいえるべき神社行政案であった。そのなかには、各市町村の中心的な御嶽を神社化（沖縄県神社創立計画案）するものや、各郡に県社を創設（県社並郷社創立計画案、既存の神社の昇格、御嶽の神社化）する計画も含まれていたという。

前田氏報告では、皇紀2600年（昭和15年）を前にした昭和14年以降の沖縄での県社創立の具体的な動きと、それが敗戦によって頓挫した経緯とともに、近代沖縄神社史のなかでのその位置づけについて報告が行われた。



写真2 研究会配信会場から報告を行う前田孝和氏（神奈川大学みなとみらいキャンパス）

2. 御嶽の神社化をめぐる議論

前田氏の報告後に行われた質疑応答では参加者から多くの質問がなされた。最初の質疑として、「なぜこの時期に御嶽の神社化が起こってきたのか」、「設立の背景に何があったのか」などがあげられ、御嶽の神社化をめぐる問題について議論が行われた。前田氏によると、御嶽の神社化については、明治34、35年頃より沖縄の新聞に関連する記事が見られるようになったという。沖縄では明治33年に徴兵制が施行された。また日露戦争も迫っていた時期でもある。参加者からは、このような状況のなかで、「武運長久の祈願」の必要性から、御嶽の神社化は進められたのではないだろうかという指摘があった。また他の参加者からも、当時の沖縄では「日清戦争で日本が勝ったというのが沖縄にとって大きなインパクトだった。そこで一気に“日本化”の流れが起きた」その“日本化”の流れのなかで神社化を整備することが加速しやすくなったという背景があると思われるという

意見もあった。前田氏もこれが「大きな流れ」となり、このあと明治43年に向かって「一気に」神社化をめぐる方針決定が行われ、造り上げられていった。しかしながら、現在までにそれを裏付ける資料はなく、沖縄の明治期の神社行政史を再構築することの難しさを感じたと述べていた。

3. 沖縄神社は海外神社の「前史」なのか

また、沖縄の神社は海外神社の「前史」として考えることができるのかという問題について質疑があった。質問者によると、これまで沖縄の神社を海外神社の「前史」として捉えることができると考えていたが、前田氏の報告を聞いて、「むしろ1930年代に台湾とか、あるいは朝鮮」などと同様に、沖縄でも神社化が行われているように感じたという。これについて前田氏は、今回は沖縄の「独特な環境」という視点で発表を行ったので、他地域との比較は行わなかった。現時点ではそういった資料も見当たらないが、今後の課題としたいと答えていた。それに対し後田多氏からは、「単純に前史が違うという理解ではなく、前提も違うのではないか」という指摘があった。後田多氏によると、琉球では御嶽は国家の祭祀空間・施設でもあり、それを変えるということは、難しかった。琉球と北海道や朝鮮、台湾の「前提」の違いについて、もう少し見ていく必要があるという。

4. なぜ神社はできなかったのか

続いて参加者から、なぜ沖縄では神社はできなかったのかという問題意識について意見が出された。発言者によると、沖縄で神社ができなかったことについては、「むしろ神社化できなかったことを高く評価」できるとし、神社化は「なんでできなかったのかではなく、できないのが当たり前のことであったのだ」という。これについて前田氏は、御嶽拝所のある程度の合理化は、神社と関係なく時代が変遷していくなかで流れとしてあり、それが時代的に神社化したのではないかと答えていた。沖縄の神社は、「神社といっても姿は神社でも神社ではない。御嶽というか、そういう元々のものを継承しており、信仰を変えることの難しさが現れて」いるものなのだという。それは戦前のみならず戦後も続き、「神社人の努力とは別個に、沖縄に神社神道が根付かない、なかなか厳しい状況が続いている」という。沖縄に神社神道が根付かない理由として、御嶽への根強い信仰が、沖縄の人びとにとって如何に大事であるかということが挙げられるという。このような沖縄を前田氏は、「独特な環境」と捉えて、内地との比較についても今後の重要な課題であると述べていた。

関連な議論が続くなか、参加者から御嶽の神社化については「手作り神社のようなものは神社に含めないのか」という質問もなされた。前田氏は、これには「区別」が必要といい、神社を「制度化されたもの」と「そ

うでないもの」に分け、今回の発表では制度化された「公認の神社」を取り上げたと答えていた。

沖縄は「神社神道にとって大変に厳しい地域」だが、波上宮や普天間宮、宮古神社などの神社については、参拝者の人数や施設の維持力などを見ていると、「本土のある一定の神社以上の力」をもっているという。このような「地元で根付いたところのお社は強く、それは「本土と何ら変わら」ず、場合によっては「本土以上」のところもあるという。しかし御嶽の神社化など「特殊な環境」にある沖縄は、やはり「神社神道にとって大変に厳しい地域」ということは間違いないという。

おわりに

前田氏報告では研究の基礎的な情報を提供していただき、質疑応答での闊達な議論展開もあり、海外神社の輪郭や問題点がさらに見えてきた。沖縄神社の制度化の取り組みを丁寧に見ていくという前田氏の研究手法からは、沖縄神社だけではなく、海外神社の本質も見えてくる。後田多氏からも「制度側から切り込んで、ある意味で“神社というのは何か”を突き詰めて考えていくことが大切だ」という指摘もあった。神社を制度史的、または時間軸で考えていくという手法によって、見えてくる世界がある。また後田多氏は、「現在の沖縄の実態として、神社と呼ばれるものがたくさんある」とも述べていた。今後はそれについても研究を進めていく必要もあるだろう。

沖縄の神社を海外神社的に考えるのか、それとも神社の特徴を描くことによって裏側から海外神社が見えてくるのか。様々な見え方があるのだということが、前田氏報告から考えることができる。沖縄神社を、海外神社の「前史」と単純に捉えるのではなく、より深く考えていくことによって、海外神社自体の本質も見えてくるだろう。視野を広げて取り組むことの必要性を改めて感じた。

最後に、今研究会では、中島三千男氏（神奈川大学非文字資料研究センター客員研究員）により前田氏の経歴紹介をしていただく予定だったが、開始時のトラブルにより発表を優先する流れになってしまった。中島氏がまとめた前田氏の経歴・業績資料によると、前田氏は北海道の神社庁に7～8年近く勤めたとある。中島氏はこの前田氏の経歴をふまえて、「海外神社研究の「前史」、あるいは「内国植民地」としての蝦夷・北海道と琉球・沖縄県における神社の建立の意味。この両方を見ることが出来る人としての期待」をしているとある。先にも述べたが、本研究会の発表内容については別途前田氏より論考が出される予定である。ぜひ前田氏の論考を参照されたい。

4回目の緊急事態宣言（東京都は7月12日～、横浜は8月2日～、いずれも9月30日まで）が解除され、少しずつ明るい兆しが見え始めたように思う。オンラインでの研究会開催にも慣れたが、やはり対面での開催を願わずにいられない。

（※本稿執筆（2021年10月末）時点）



写真3 発表者の前田孝和氏と司会の後田多敦氏